

宿営の外に出て

2025年8月17日

ヘブル人への手紙 13章11～14節
レビ記 1～7章、16章
 全焼のいけにえ
 穀物のいけにえ
 和解のいけにえ
 罪（罪過）のためのいけにえ

序：過越の子羊のいけにえ ⇒ イエス・キリストの贖いの死
大贖罪の日における幕屋（神殿）の祭儀
いけにえの動物の血は、大祭司により至聖所に携え入れられ注がれる
" 体（皮、肉、脂肪、内臓）は宿営の外で焼却される
祭儀奉仕者の食物として提供されることはない

予型 ①ユダヤ教徒がキリストの恵みによる救いの祝福を受け取らない
 ②キリストがエルサレムの中ではなく、郊外のゴルゴタで処刑された

I. イエス・キリストの死と大贖罪のいけにえ

神の臨在される、聖なる会見の場ではない幕屋の外、宿営の外ではふられた
焼却された
イエスが十字架につけられたのも、エルサレムの城壁の外

祭司たちはそのささげものを食べる権利がない
イエス・キリストは、罪を取り除く子羊としてかつ大祭司としてご自身をささげ
てくださった（一度で完全な贖い）
キリストはその血によって、永遠の贖いを完うし、天のまことの聖所に入られた
信じる者たちは、贖い主イエス・キリストを供え物として携えて、神の祭壇に
近づくことができる

II. 宿営の外

本来、宿営・幕屋は神の民が神との会見、交わりを与えられる場
そこが不信仰・不従順に支配されるなら、主は外に出てしまう（神不在）
cf. シナイでの偶像礼拝（金の子牛）⇒ 会見の天幕は宿営の外

イエスをメシアと認めず、拒絶したエルサレムは、もはや神の聖なる宿営ではない
かつては汚れた場所である宿営の外が、聖なる場所となった

イエス・キリストはエルサレムの城外のゴルゴタで十字架にかかり贖いの死を
遂げられた（ご自分の血によって民を聖なる者とするため）
処刑のための十字架を担って、エルサレムから刑場に向かう歩みは、屈辱と
恥かしめと敗北に満ちていた

しかし、究極的には勝利と栄光が保証された歩み
主が地上で歩まれた道 ⇒ 私たちが地上で歩む道

Ⅲ. 主にある者の歩み

ご自分の血（いのち）を代価として、私たちを聖なる者とするため、宿営の外に出られた主イエス・キリスト

ゆえに、

(1) 私たちもまた、キリストの辱めを身に負い宿営の外に出よう

ユダヤ人のキリスト者にとって、宿営の外に出ることは二つのことを覚悟

- ① ユダヤ人からの迫害
- ② ローマ帝国からの迫害

肉親、親しい友人、慣れ親しんだ習慣や生活にとどまる＝安全？
思わぬ誤解、反対、攻撃、迫害も覚悟 対策も準備する

(2) 主の兵士として、徴募に応じて主のみもとに行こう（世のもの⇒主のもの）

ルカ 9・23

イエスは言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

救い主を信じて従い通す新しい信仰の冒険へのチャレンジ

(3) 地上のものに希望をおかない（究極の目的地は来たるべき永遠の都）

地上のものは一時的、不完全

今は地上の旅人、しかしゴールは永遠の都（御国）

地上では都、宿営の外に出たが、天では永遠の都に入る

コリントⅡ 4・16～18

ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。私たちの一時の軽い苦難は、それと比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

Ⅳ. 結び

(1) 救い主イエス・キリストとその救いを恥としない

信じる者を義なる者・聖なる者とするための十字架は本来は呪わしいもの
キリストの受けられた恥かしめを負うこと（従う者とともに）

反対者の攻撃に負けて妥協しても、かえって軽蔑される
反対者は信仰者の一貫した信仰に、心打たれることも少なくない

人を恐れる者は神を恐れない、神を畏れる者は人を恐れない

(2) 主キリストに従う＝日々自分の十字架を負って

それぞれの負うべき十字架がある

主に従うにはなくてはならないもの

御足の跡を、イエス・キリストに先導されてたどる道

途中で、いろいろなところを通され、様々な経験をするが、すべて益となる

(3) 私たちの人生の目的は苦難に会うことではない、永遠の都に入ること

宿営（地上のエルサレム）から外に出されるが、永遠の都に永遠に神とともに住む

約束され、保証されている勝利と栄光をいただくことは確実

(4) 目先の損得、思いがけない試練。この世の欲や力におもねたり、自己卑下して
主のみこころ、御霊を悲しませないよう、信仰と希望を失わない歩み